慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「神の器官」：ノヴァーリスのヘムステルホイス研究
Sub Title	Das Organ des Gottes : Hemsterhuis-Studien von Novalis
Author	柴田, 陽弘(Shibata, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1991
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.59, (1991. 3) ,p.111(330)- 130(311)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大濱甫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00590001-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「神の器官」

――ノヴァーリスのヘムステルホイス研究――

柴田陽弘

I

1797年という年は，ノヴァーリス（フリードリッヒ・フォン・ハルデルベルク1772―1801）の短い生涯の中で最も実り多い思想形成が行われた年であった。この年の早春にはフィヒテ哲学との対決があり，秋にはヘムステルホイス（1721―90）に集中的に取り組み，晩秋にはカントの批判的研究を行っている[1]。この年，許婚のゾフィー・フォン・キューンが早逝したこともまた，ノヴァーリスの精神世界を根底から揺るがして，哲学研究に沈潜させる契機となった。この年に成った手稿は大きさもまちまちなら，筆蹟も異なる107枚の研究ノートであり，その内の36枚がヘムステルホイス研究に当てられている。この手稿Pとか，K56―63，MⅡa―d，MVa―d，S13のように呼ばれている原稿群は，P. クルックホーンのノヴァーリス著作集第一版[2]に収められはしたが，コールハマー社版の新著作集では配列にかなりの修正が加えられた。このヘムステルホイス研究ノートもまた，他の哲学研究ノートと同じように，原典から自由に抜き書きが行われ，表現も自在に変えられるかと思うと，独自の着想が付け加えられるといった，まさにノヴァーリスの研究の息使いが如実に感じられるものである。したがって研究者は，原典と補足とを厳密に読みわけながら，ノヴァーリスの独自性を計量する必要があった。近年，H.-J. メールの厳正緻密を極める考証に基づく編年体の新著作集のおかげで，ノヴァーリス学の末席に連なる者にも，ノヴァーリス思想の全貌を概観することが可

能になった。ノヴァーリスの手稿群の編纂の伝統には，詩人の姪のゾフィー・フォン・ハルデンベルクに始まり，E. ハーヴェンシュタインを経て，P. クルックホーンからH.-J. メールにいたる一連の系譜がある。また一方では，これと関連して，詩人の死の翌年に早くも刊行された F. シュレーゲル，L. ティーク編集の著作集から，E. ハイルボルン，J. ミーノル，P. クルックホーン，R. ザムエルらによる著作集の系譜がある。手稿編纂史はそのまま著作集に反映し，さらにノヴァーリス研究の大枠の傾向に強い影響を与えている。たとえば，ティークによる著作集の恣意的な編集が，多くのノヴァーリス研究を誤謬に陥らしめたことはよく知られている。しかし1929年の P. クルックホーン編纂の著作集には，ヘムステルホイス研究手稿が収められており，その配列に問題は残るものの，カント研究手稿ほどの軽視は受けていない点に留意しなければならない。それにもかかわらず，たとえば T. ヘーリングは両手稿に消極的評価を下している。すなわち，1797年秋に新たに行われた研究は，ハルデンベルク（ノヴァーリス）の足跡に格別の局面をもたらしはしなかった。最初の読書が抜きがたい印象を刻みつけていたからである。このような消えがたい印象は，1795／96年に行われたフィヒテ研究ノートにも歴然としている，というのである[3]。

そこでヘーリングがいうように，ヘムステルホイスをノヴァーリスが最初に読んだのはいつ頃かが問題になるであろう。それが少なくとも1791年まで遡れることは確実である。というのは，友人のフリードリッヒ・シュレーゲルが1792年１月に，兄のアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルに宛ててつぎのように書いているからである。

「かれの愛読する作家はプラトンとヘムステルホイスだ――われわれの出会いの最初の頃のある晩，かれは滔滔と自説を述べたてた――世の中に悪などない――すべてはふたたび黄金時代に近づきつつある，と。これほどまでの青春の明るさを，ぼくはこれまでに見たことがない。[4]」

ノヴァーリスは1791年10月にライプツィヒ大学に入学し，翌年の１月にはF. シュレーゲルとの運命的な出会いがあった。上の書翰からは，二人の若い知性の青春の息吹が生き生きと伝わってくる。そこにはノヴァーリスの個性が実に適格に描写されていて，若いシュレーゲルの才能を彷彿とさせるのである。上の記述からも，二人の出会いの最初の幾夜かに，ヘムステルホイスについても議論が戦わされたことは想像に難くない。1790年のノヴァーリスの蔵書目録を見ると，ヘルダーの『つれづれ草紙集』第１巻（1785年）が収められている[5]。この『草紙』には，ヘルダーが1781年にドイツ語に翻訳して Der Teutsche Merkur に発表した，ヘムステルホイスの作品「欲望について[6]」が再録されている。ヘルダーはまた論文「愛と自己性」で，このオランダの哲学者をつぎのように論じている。人間の魂の中の欲望の本質について，プラトンこの方ヘムステルホイスほど豊かに繊細に考えた者はいない。その哲学体系は世界のように大きく，神と我々の魂のように永遠である，と[7]。1790年といえば，ノヴァーリスがアイスレーベンのギムナージウムの最上級生だった頃である。おそらく，すでにこの頃にはその哲学に親しんでいたことは確実であろう。ヘムステルホイス全集がフランス語とドイツ語で刊行されたのは1792年（および1797年）のことであるが，それ以前には，前述のヘルダーのほかに，1787年に F. H.ヤコービがフランス語の手稿から翻訳し，出版した『アレクシス，あるいは黄金時代について[8]』や，『ヘムステルホイス哲学著作集[9]』も流布していた。ノヴァーリスの「ヘムステルホイス研究」から察するに，黄金時代の形象をこのヤコービの翻訳に負うていることは明らかであろう。

さてノヴァーリスはなぜヘムステルホイス研究を再開したのだろうか。かれは1792年のフランス語版全集を A. W. シュレーゲルから借りている。そして1797年11月30日，フライベルクの鉱山大学へ出発する直前に返送している。「ようやくヘムステルホイスから離れることができました……[10]」という謎のような言葉を添えて。したがって少なくとも同年の９月５日から11月30日までは，ヘムステルホイス研究に没頭していたことがわかるのである[11]。これには何らかの内発的な理由があったのだろうか。1797年の

9月にドイツ語版のヘムステルホイス著作集第三巻が出版され，それが『アレクシス』を含んでいたこと，そしてこの時期F. シュレーゲルが「アレクシス論」を計画していたこと，なども契機にはなったであろう[12]。H.-J. メールはつぎの三点を挙げて推論している[13]。

その一は，フィヒテからの乖離である。ノヴァーリスは1795年秋にフィヒテと集中的に取り組んでいる。その結果，「観念連合」および「偶然生産」の概念を基礎にした独特のポエジー思想を育むのであるが，それには私生活上の重要な転機が与っている。1797年3月19日の許婚ゾフィー・フォン・キューンの死がそれである。同年5月13日にゾフィーの墓前で，ノヴァーリスは実に不可思議な体験をする。時空を一瞬に超越して，生と死の境界を乗り越えるのである。こうしてある着想が，ノヴァーリスの中に芽生え，急速に成長していく。それは「無限の愛のイデー」とでも言うべきもので，これによって内部と外部，彼岸と此岸の障壁がやすやすと取り払われる。ノヴァーリスによれば，フィヒテにはこのイデーが欠けているゆえに，フィヒテから離れたのである。

「フィヒテは知識学から離れることができません。少なくともぼくには不可能に思われる自我の転換などということを抜きにしては」[14]

こうしてノヴァーリスの重要な思想変革に，ヘムステルホイスの「道徳器官論」が大きな意味をもつようになった。

その二は，ヘムステルホイスのポエジー概念が，ノヴァーリスの心を深くとらえたことである。ヘムステルホイスは悟性に基づく知的活動を批判して，ポエジーを諸学問の上位に置いている。彼によれば，ポエジーこそが感情の言葉，想像力の言葉，熱中の言葉であって，それはまさに神々の言葉と呼ばれるにふさわしい。この思想に寄せるノヴァーリスの共感は，研究ノートのはしばしに痕跡を残している。

その三は，ヘムステルホイス独自の自然科学と哲学思想とのアナロジーが，ノヴァーリスの関心を著しく惹きつけたことである。ちょうどこの時期，フライベルクの鉱山大学入学を目前にして，一層自然科学研究に身を入れ始めていたこともあって，ヘムステルホイスの思想世界はノヴァーリ

スのそれを大きく飛躍させるきっかけとなった。

Ⅱ

ノヴァーリスは1794年11月にゾフィー・フォン・キューンと出会い，翌年3月に婚約をする。ゾフィーは13歳だった。同じ年の11月にゾフィーは発病する。1796年1月，ノヴァーリスはランゲンザルツァの薬剤師 J. Ch. ヴィークレープの許で化学の講習を受ける。製塩所監督局に配属されたのを契機に最先端の自然科学の知識を身につけようとしたためである。1796年7月ゾフィーはイェーナで最初の手術を受ける。傷は化膿し，高熱と苦痛が若い娘を苛むが，ゾフィーは健気にもよく耐え忍ぶ。しかし1797年3月19日，わずか1年数ケ月の闘病生活の後，ゾフィーは死ぬ。15歳と2日だった。前年の末にゾフィーが回復のきざしなく，空しく故郷グリューニンゲンへ戻った頃，ノヴァーリスはすでに覚悟を決めていた。「冷静――どんなに絶望的なことが起こっても。たとえばゾフィーのこと[15]」というようなメモが残っている。そしてゾフィーの死後，ノヴァーリスは日記をつけ出す。暦の日付と並べて死後何日と書き添えて[16]。今日われわれはそれを，ゾフィーの死後31日目，4月18日の火曜日から読むことができる。その4日前に弟のエラスムスも亡くなっている。夭折者がノヴァーリスの周りにあふれている。死への想念が深みを増すのはこの頃である。日記には，しばしば「目的」とか「決心」とかいう言葉が書き付けられる。ゾフィーのあとを追って自殺しようというのである[17]。ゾフィーの主治医だったヨーハン・ゲオルク・ランガーマンにも，この決意を話して相談している[18]。日記には Sie と大文字で，あるいはSと頭文字だけで記されたゾフィーと，同化したいという想いが，淡々とつづられる。4月16日の最初の墓参以来，何度もゾフィーの墓へ出かけて行く。十九世紀ロマン主義の，感情過多の故人追憶は，ここには見られない。墓前ではしばしば瞑想にふけっている。墓参と墓前での故人追懐は，のちの十九世紀ロマン主義の先取りである。「決心」が確固としているか，何度も自分で計量

する。ゾフィーが実行に力を貸してくれることを確信しながら。「ただもっと彼女の中に生きなければならない。彼女のことを考えているときだけが，本当に幸せだ。[19]」ときには決心がぐらつき，こう書き付ける。「ぼくはあいかわらず，あの決心にすっかりなじみきっていないに違いない。決心はいかにもしっかりしているようにみえて，時にはぐらつくので，はるかに到達しがたい彼方にあって，およそなじみの薄いものに思われるのである。[20]」花を摘んでは，グリューニンゲンのゾフィーの墓に詣でる。「たいへん幸せな気分だった――冷静だったが――やはり泣いてしまった――黄昏がとても美しかった――しばらく墓にすわっていた――[21]」「花を摘み――墓に撒いた――彼女とひとつだった――この半時間たいへん幸せで，落ち着いていた。[22]」

そしてゾフィーの死後56日目に当たる5月13日，決定的な瞬間が訪れる。

「夕方，ゾフィーのもとへ行った。そこでぼくは名状しがたい喜びに浸った――きらめく恍惚の瞬間――ぼくは眼の前から墓を塵のように吹きとばした――数世紀が数瞬間のようだった――ゾフィーが近くにいると感じられた――これからはいつでも彼女は姿を現わすだろうと思った。[23]」

翌14日の晩にも，ゾフィーの墓のほとりで，はげしい歓びの瞬間を味わう[24]。ゾフィーと一体化したいという願望，「どんな瞬間にも彼女にふさわしく生きたい――ぼくの第一の課題は――一切を彼女のイデーに関連づけることでなければならぬ[25]」と思いつめた思索の行き着いたところが，前述の日記の体験に集約されるのであろう。外部の表象世界にありながら，内部世界を感覚できるというノヴァーリスの予感は，ゾフィーの死をきっかけにして，いよいよ確信にまで深まった。時間と空間を超えた「見えない世界」を内部感覚化することが，ゾフィーの墓前で体験できたのである。ゾフィーの死後二ケ月を過ぎた頃，ノヴァーリスはこう書き記している。

「感覚的な痛みがうすらぐにつれて，精神的な悲哀がますます大きくな

り，静かな絶望のようなものがますます高まっていく。世界はますますなじみ難くなり――まわりの事物はますますどうでもよくなっていく。それにひきかえ，ぼくの周りとぼくの内部は今や一層明るくなっていく。[26]」

そして内部を自在に統御できるように自己鍛練しようとする。努力とある手段によって，一定の気分を思いのままに自分の内部に醸し出せるように努める[27]。ノヴァーリスは死をも統御しようとしている。その死は至高者に対する真情の証明，真の献身でなければならない。逃避とか，一時的な方便であってはならない，と考える[28]。6月の9日には，ゾフィーの死後，自分をとりまいている孤独についてのイデーを発見する。彼女が死んで，ぼくにとっては全世界が死に絶えたのだ。もはやぼくはこの世に属してはいない，と[29]。そして死後三ケ月たった六月の末には，「キリストとゾフィー[30]」と書き記す。ぼくは追想にもっと多くの時間と瞑想を捧げ，外部的にもっと彼女の思い出の中に生きなければならない[31]，という決意の実行の中で，しだいにゾフィーが神化されていく。

「ぼくはゾフィーに宗教心をいだいている――世俗の愛ではない。絶対的な愛，心情に依らない，信仰に基づく愛は，宗教なのである。[32]」

さらに同じ頃，内部空間の知覚について，つぎのような覚書きを遺している。

「ゾフィーがぼくの周りにいて，姿を現わすことができると信じ，そう信じて行動すると，彼女もぼくの周りにいて――ついには必ず姿を現わすのだ――まったく，おもいもかけない所に――ぼくの内部に，ぼくの魂などとして，そしてまさにそのことによって本当にぼくの外部に――本当に外的なものは，ぼくを通してのみ，ぼくの内部に，ぼくに働きかけることができるのだから――それもうっとりとした美しい状況の中で姿を現わすのである。[33]」

ゾフィーの死後31日目から110日目に当たる4月18日から7月6日までの日記は，ゾフィーを追憶し，哲学的内省にふける青春の悩みをみずみずしく投影している。きわめて禁欲的な求道生活の印象が強い。彼は，フィヒテを読み，シェリングを読み，ヒュルゼンを読む。最先端の哲学思想に沈潜するかたわら，死者との対話を試みる。同じ年の暮になされたカント研究ノートには，「知のやむところに，信仰が始まる[34]」と記されている。哲学的思索のいきつくところは，カント的な実践理性の要請を越えた，より高次の認識の世界の門を開くことである。1797年の10月から11月にかけて，ノヴァーリスがヘムステルホイスを再読し始めた動機も，上述の経緯から類推すれば，ごく自然の帰結であったと言えるのではなかろうか。次章では，ヘムステルホイス研究ノートの検討によって，ノヴァーリスの思想的境位がどう深められたかをみることにしよう。

Ⅲ

ノヴァーリスが取り組んだヘムステルホイスの著作は，『彫刻についての書翰』『欲望についての書翰』『人間とその関係についての書翰』『アリステ，あるいは神性について』『アレクシス，あるいは黄金時代について』『シモン，あるいは魂の機能について』『ディオクレスからディオティームへの書翰，無神論について』の7点である[35]。厳密な手稿の校閲によって，読書の順序がヘムステルホイス著作集のドイツ語版ではなく，フランス語版に依拠してすすめられていたことが明らかになった[36]。どうやらノヴァーリスは，翻訳しながら抜萃していったようである。その反訳作業はノヴァーリス固有の癖のあるもので，原文を自在に書き換え，独自の思想を挿入するといった特色をもっているが，ドイツ語版（1782／1797）と比較すると，フランス語版の術語を踏襲していることがよくわかる[37]。

まずフランス語版から一例を挙げよう。

「こんなわけで，詩（poësie）が偉大な天才の努力から生まれるにせよ，神の息吹（souffle divin）が作りだすにせよ，すべての芸術，すべての科学を支配しており，この尊厳なる事実に対しては，美の三神（Grâces）が愛の神に対するのと同じ位置を占めるばかりでなく，曙が照らしだし口をきかせるメムノンの像に対するような位置を占めることが，おわかりいただけたでしょう。[38)]」

そしてノヴァーリスの抜萃では——

「天才も神的な霊感も似たような働きをする——両者はしばしば混ざり合う。／熱中は光と熱である——しかし灼熱の火をもたない光もある。／ポエジー（Poësie）の精神は暁の光である，それはメムノンの像を鳴り響かせる。[39)]」

この例だけを見ても，ノヴァーリスの哲学研究ノートの特徴が明瞭であろう。原典の読書によって啓発されると直ちに抜き書きをし，ときには忠実に，ときには自由自在に表現をかえて，生き生きとした着想の痕跡を書き留めるのである。それゆえ，このように独自の発想の羽ばたきと原典との定かならぬ境界を絶えず計量しながら，ノートを読み進めることが必要になる。

ヘムステルホイスは啓蒙期の哲学者としての特徴も維持しながら，合理主義と非合理主義との間を揺れ動いている。その論ずるところによれば，悟性の過信が人間の能力を局限する結果をもたらして，無限の内部空間を感覚する能力が著しく鈍磨してしまっているのである。世界の本質は，科学によって探求しようとする限りは，決して我々に開示されることがない。たとえばシェリングは「世界霊」を，そしてフィヒテは「絶対我」を措定したが，このような抽象的統一原理によって世界の真髄に到達することは難しい。ヘムステルホイスによれば，むしろそれは外部の現象世界（l'univers visible）に隠れているものである。

「あまたのこれらの有限で定まった客体の中に，偉大な無限の原理に刺戟された，この原理に対する無限の類似物を見い出そうという，当てのない並外れた希望を懐きつつ，さらに先へと進んでゆくのである。[40]」

このような原理を，あたかも無限遠点のごとくに追いもとめる，決して報いられることのない無限運動を，ノヴァーリスはつぎのように述べている。

「われわれはいたるところに絶対的なものを求めるが，見い出すのはいつも事物だけである。[41]」

ヘムステルホイスは，かような宇宙の未知の神秘を「道徳的側面」(la face morale de l'univers) と呼んでいる。この側面と人間の道徳器官とは内応し合う関係にある。

「この器官は神聖なものに向けられている，眼が光に向けられているように。[42]」

ノヴァーリスはのちに，「道徳器官についてのヘムステルホイスの期待は真に予言的である」と書いている[43]。啓蒙期の悟性偏重がもたらしたものは，神聖なものに向けられ，より高次の世界を洞察する人間内部の道徳器官の能力の退化だった。このまどろんでいる神通力を意識的に開化させ，世界の本質と，その秩序を把握するべく努力すること，これが「道徳的」なのだという。つぎのヘムステルホイスの言葉は，上の機微を説明しているものと言えよう。

「朝の星のかすかな光では，眼のまわりの客体をほとんど識別することができない。しかし太陽が昇ると，可視の世界が姿を現わす。おそらく道

徳的本質の感覚伝達手段は，この生のあけぼのの後にもっと多くのエネルギーをもつことだろう。あるいは，おそらく知覚と心の器官は，われわれが大雑把に扱っては，その能力をふるうことができないだろう。それらは，さながら，さなぎの皮膚の下に隠されているまだ形を成していない羽のようなものである。[44]」

「いくつかの幸せな魂が昇華するのは，このような羽をもってである。それらの魂は専ら自己完成をめざしている。それらは，まわりの地上的な滅びゆくものから解き放たれる。それらは進化の度合を速める。新しい器官が現われる。すると，神とわれわれの関係はより直截的になり，あなたや他の人達にとっていまだに無の中にあるような側面から，宇宙がわれわれに顕現するのである……人間の最も美しい仕事とは，ソクラテスよ，太陽をまね，できる限り短い世紀のうちに，包みの中からこれを自由にすることなのだ。そして魂がすっかり自由になった時に，すべてが器官となるのだ……すべての感覚は統合し，すべて一つのものとなり，そして魂は宇宙と神の中にではなく，神々のする如くに見るようになるのである。[45]」

A. W. シュレーゲルがかって「ヘムステルホイスの著述は知的な詩と呼ぶにふさわしい」と評したことがある[46]。そこには，詩人としての資質と分析的な哲学者とが同居している。悟性と感情との微妙な融合がある。この頃，ノヴァーリスがフィヒテを超克しようと格闘していたことを考え合わせると，ヘムステルホイスがひとつの啓示となったことは想像に難くないのである。F. シュレーゲルに宛てて彼はこう書いている。

「フィヒテはぼくの識っている思想家の中で最も危険な人物だ。彼はひとをとりこにして離さない。……きみはフィヒテの魔力に抗して，向上しようと努める自我思想家（Selbstdenker）を守るべく選ばれた人だ……この抽象の恐るべき花輪の中で進むべき方向がわかるように，きみの与えてくれたあまたの指示に感謝している……[47]」

フィヒテからの乖離とヘムステルホイスへの接近，しかしこれはノヴァーリスにあっては一筋縄ではいかない。ヘムステルホイスをフィヒテ的意味で展開してみせたりするからである。たとえば『アレクシス』につぎの箇所がある。

「しかしこの場合，話す者が発する言葉よりも，むしろ知の動きに従いながらその非をただすべきなのは聞き手の方なのである。こうすると，これらの言葉は聞き手の頭の中で自動的に翻訳され，聞き手がより慣れている記号に置き換えられるであろう。[48]」

ノヴァーリスはこれに解説を加えている。

「ここは哲学の精神と文字についてのすばらしい箇所である。彼によれば，文字は哲学的伝達の手段にすぎない。その固有の本質は省察にある。話し手は聞き手の中に思考の筋道を導くのだ――そしてそれによってそれは省察になるのである。彼は考え――そして他は省察する。言葉は思考以前（Vordenken）の当てにならない媒体（Medium）である。真理はその本性に従い指針となるべきものである。つまり肝心なのは，人を正しい道に導くこと，あるいは，もっとふさわしい言い方をすれば，真理へ至る一定の方向づけを行うことだけである。そうするとおのずから目標へ到達するのであるが，またそれとは別に真理を求めて熱心に活動すれば，即座に到達するのである。哲学の叙述はそれゆえに主題のみ，発端の命題のみで成り立っている――区分の命題――一定の合流命題から成っている――それはただ活動する者，真理を愛する者のためにある――主題の分析的な仕上げはただ怠惰な者，あるいは行動しない者のためにある……[49]」

このようにフィヒテが哲学上精神と文字とを区別している命題を援用したり，絶対我に至る無限の活動を連想させる叙述もある。ノートには変幻自在にフィヒテとヘムステルホイスが見え隠れする。ある時はフィヒテに

抗い，またある時はヘムステルホイスに組する。つぎに挙げるのは，『アレクシス』の一節である。ヘムステルホイス特有の対話体で書かれている。

「ところでもしあなたが，人間に生まれつき備わっていると思われる希望についてお考えになれば，といっても，現在の状態と比較して〔より良さ〕しか求めない日常的な希望ではなく，常に絶対的な〔より良さ〕を目ざす希望についてお考えになると，人間の欲望や本能や完全なものになる可能性の原理は限定されておらず，われわれの今の状態では感覚に境界がないことを確信されるでしょう。そしてそこから人間は必然的に他の状態に拘泥するということも。――人間はそのような状態にたどりつくことができるでしょうか――いいえ，友よ，卵から孵ったばかりの小鳥がいて，私がこの小鳥は飛ぶ特性をもっていますよと言いながらその羽を見せたら，あなたははたして飛ぶだろうかと心配しますか――いいえ，そんなことはありません，それはいつかは飛ぶでしょう――たまたま岸の上に生まれた稚魚がいて，その魚の構造から長く空気中にいては生存できず，水中を必要とする性質だと証明したとしたら，あなたは，つぎの高潮のとき泳ぎ出さないのではないかと心配なさいますか――もちろん泳ぐでしょう――それでは，地球が動物としての人間に与えることのできるごく僅かなものとまるでかけはなれた欲求を自然に対して抱く人間を，わたしが指し示したら，あなたは地球が人間の性質に適合しているとお考えになるでしょうか――[50]」

ノヴァーリスはこれに対してつぎのような見解を書き記す。

「願望と欲望とは異である――われわれの地上の生活の状態にほとんど適合しない願望や欲望がある――われわれは確かにそれが大きく揺れ動くある状態を推論することができ，それを高めるある要素や，それが定住できる島を推論できるのである。[51]」

ここでは，ヘムステルホイス思想のエッセンスが安々と抽出され，隠喩によって，独特のイメージが紡ぎ出されている。「翼」「島」というような象徴言語の使用，主題の綜合的処理（「主題の分析的仕上げ[52]」の拒絶）など，のちの『花粉』断章群を思わせる内容と形式を備えた断章であると言えよう。もはや単なる抜萃の域をつき抜けた一つのジャンルの誕生が，ここには見られるように思われるのである[53]。

さてすでにみたように，ノヴァーリスのヘムステルホイス研究は，ノヴァーリス思想の展開の上で重要な意味を担っている。それはいくつかのキー・ワードで表すことができよう。いわく「愛」「道徳器官」「ポエジー」「道徳天文学」「普遍物理学」等々。たとえば『アリステ』のつぎの箇所を読んでみよう。

「親愛なるアリステよ，あなたがはっきりと感じているこの原理，この愛，どんな存在や事物とも本質で結合しようとするこの傾向，これらは何らかの方法で存在物を結びつける力であり，等質性原理によって働くものなのだ。この原理，ないしこの力の性質から派生する法則が……道徳を構成しているのだ……[54]」

ここでは，「愛」が宇宙を統べる統一原理とはっきり規定されている。完全な統一と調和が実現されている道徳的世界には，愛という宇宙法則が支配している。そして「宇宙の道徳的側面は天空よりはるかに未知で果てしのないものなのである。[55]」しかも「われわれが今見ている世界は，現在の，われわれの側からは受動的な神との関係の総体なのである。[56]」こうして道徳器官が実は「神の器官」であることが明らかになる。「現実的なものと可能的なものとからこの世界はできている――両者はひとつの原理から成り，神の前ではひとつである。人間だけが両者を区別するのである。神の前では悪もないのだ。[57]」

つぎに挙げるのは，ヘムステルホイスのポエジーについての言及である。

「私はここに初めてポエジーが何であるかを把握する。どんなに深い思考も，知性のどんなに賢明で，熟慮された働きも，観念を相互に接近させるこの熱中に支えられ，導かれ，又はその衝撃を受けていない限りは，新しい真実をわれわれに与えることはほとんどないと感じる……この能動的熱中はしばしば外部の主体の行為と混同され易いが，われわれはこの熱中の性質についてほとんど無知であり，この無知が，人間は自然が完全な存在に要求するようなものとはいえない，というあなたの意見を説明してくれる……あなたがいわれるように，そして私も感じているように，哲学が詩に多くを負うているということが正しいなら，親愛なるディオクレスよ，あなたの行為のもとで，哲学が無駄骨ではないということもまた正しい。ある特別な理由により，この熱中，この観念の特別な近似が，この真のポエジーの豊かな源泉が，今後，私の勉強と私の研究の最も気のきいた対象となるであろうことを約束しよう……[58)]」

ヘムステルホイスの「ポエジー」とは，あらゆる学問芸術の上位にある「熱中」の言語である。ポエジーはより高次の認識器官に属する故に，現象世界しか把握し得ない理性的学問に優先して，宇宙の不可視の側面を開示してくれる。ノヴァーリスは研究ノートにつぎのように書き記している。

「歴史――哲学――そしてポエジー――最初のは調達する――二番目のは分類して説明する――三番目のは，それぞれ個々の品性をその他の全体との選び出された対比によって高める。そして哲学が外的な全体の形成により，あるいは立法により，完璧なポエジーを可能にするなら，いわばポエジーはそれによって初めて意味と優雅な生活とが与えられるような哲学の目的となるのである――なぜなら，ポエジーは美しい社会や内的な全体を――世界家族を――宇宙の美しい家政を――形成するからである――哲学が体系と国家によって，個の力と宇宙とその余の人類の力とを組み合わせるように，そして個の力をそれぞれ補強するように――全体を個の器官

に，個を全体の器官にするように――ポエジーもそうするのである――享受（Genuss）を考慮して――全体は個々の享受の対象であり，個は享受全体の対象である。ポエジーによって，最高の共感と協力活動が――実際に，きわめて内的で，きわめて堂々たる共同社会になるのだ。[59]」

ここには，「想像力を凝縮し，集中する能力[60]」の言葉としてのポエジー思想の独特の展開が観察できる。「学問はすべて詩化されなければなりません[61]」という，後のポエジー概念の着想が，この頃えられたことはまず間違いのないところであろう。

さらにノヴァーリスの着想の萌芽となったと思われるヘムステルホイスのアナロギー思考について簡単に触れておく。

「神が物質に慣性と引力の法則を与え，そこからこの法則に適合しないすべての活動に対する反作用が派生するのと同じように，神が互いに愛し合い，一緒に結びつくようにと自由で能動的な存在に与えた，われわれの本質から派生する法則。そしてもし生命のない物質の粒子が感覚をもち，話すことができたら，粒子はその同質体へ近づこうとする傾向から離してしまおうとするすべてのものに対する反作用について，われわれが意識について描くことのできるような情景と似たものを描いてみせてくれるだろう。[62]」

また別のところでは，「引力に愛情を，可塑性に真空の嫌悪を……当てはめてごらん[63]」とも述べている。いずれも物理的世界と精神世界ないし道徳的世界とのアナロギー思考に特色がある。このような思考法は，十八世紀にはそれほど稀ではなかった[64]。ノヴァーリスは，たとえば，つぎのように述べている。

「かくて善行と徳の内的で崇高な満足が――より高次の物理学／形而上学／の法則に則って／説明できるのだ。[65]」

このような物理ないし自然科学の象徴的道徳的な取り扱いが，のちのノヴァーリスの特色となる[66]。

さて以上のように，ヘムステルホイス研究ノートを大雑把に概観して，のちのロマン主義者ノヴァーリスの思想世界を構成する実にさまざまな概念が，この読書体験を通じて，独自の展開をみせていることが明らかになったように思う。すなわち，「学問の詩化」「関係」「天才」「想像力」「享受」「詩的哲学者」「愛」「道徳器官」「神」「ポエジー」等々の概念である。1797年，ゾフィーの死後に芽生えた，現象世界にありながら内部世界を感覚し得るという着想ないし予感は，ヘムステルホイス研究によって確信にまで高まり，同年晩秋のカント・エッシェンマイヤー研究でさらにその成熟度を深めたと言ってよいだろう。1798年5月に発表された『花粉』のつぎの断章は，ヘムステルホイス研究ノートの断章形式をさらに洗練して，その思想の精華をみごとに表現したものである。

「宇宙はわれわれの内部にあるのではないだろうか。われわれはわれわれの精神の奥底を知らない――内部へ神秘な道は通じている。永遠とその世界――過去と未来はわれわれの内部にあるか，どこにもないか，なのである。外界は影の世界である――それはその影を光の国へ投げかける。今のわれわれには，内部はとても暗く，寂しく，形のないものに思われるが――この暗闇が去って，影の本体が無くなると――まるで違ったようにみえることだろう。[67]」

「魂の座は，内部世界と外部世界の触れ合うところにある。両者が浸透し合うところなら，その浸透のあらゆる点にある。[68]」

「人間には，自分の外にあるという能力，意識して感覚の彼方にあるという能力が備わっていないというのは，勝手な偏見というものである。人間はいついかなる瞬間にも超感覚的存在であり得るのだ。[69]」

「魂の座」の着想はカント研究によって得られたものではあるが，その

前提となったのはヘムステルホイスの「道徳器官」である。人間が無限に善へ向かうのは，この器官があるゆえである。神ないし宇宙との直感的神秘的合一は，この器官によって可能になる。「内部へ通じる神秘な道」を模索していたノヴァーリスが，この思想に深い啓示をうけたであろうことは想像に難くない。ヘムステルホイスによって，意識的に「自分の外」「感覚の彼方」にあって，「内部世界と外部世界の触れ合うところ」に至りうるという確信を深めることができたのであろう。ノヴァーリスはある断章で，「ヘムステルホイスはしばしば論理的なホメロス風詩人である[70]」と述べている。この詩人的哲学者を言い得て妙であるが，この哲学者がときに見せる予言者風な身ぶり，ロマン主義を先取りする言説，その予感に満ちた感情豊かな詩的言語が，ノヴァーリスの資質に何よりも寄り添ったであろうことが，研究ノートの端々に表れている。「道徳器官」はノヴァーリスにとって「神の器官」だったのである。

註

1) Novalis Schriften. 2. Bd. hrsg. v. R. Samuel, H.-J. Mähl u. G. Schulz Stuttgart 1965 S. 297ff. (Abgek. N. S. II S. 297ff.)
2) Novalis Schriften. 4 Bde. hrsg. v. P. Kluckhohn Leipzig 1929 (Abgek. Kl.)
3) Theodor Haering: Novalis als Philosoph. Stuttgart 1966 S. 629.
4) Novalis. Dokumente seines Lebens und Sterbens. hrsg. v. Hermann Hesse u. Karl Isenberg. insel taschenbuch 178 1976 S. 113
5) N. S. IV S. 692ff. Nr.4
6) Über das Verlangen. Ein Brief an Herrn Theodor de Smeth zu Amsterdam. In: François Hemsterhuis. Philosophische Schriften. hrsg. v. Julius Hilß Bd. 1 Karlsruhe u. Leipzig. eine Übersetzung von *Lettre sur les dêsirs*.
7) Herder: Liebe und Selbstheit. Eine Nachtrag zum Briefe des Hr. Hemsterhuis über das Verlangen. Wintermond 1781 S. 211-235 u. S. 98
8) Friedrich Heinrich Jacobi(Übers.): Alexis, oder Von dem goldenen Weltalter. Riga 1787 (*Alexis ou de l'âge d'or*)
9) Vermischte Philosophische Schriften des H. Hemsterhuis. Leipzig 1782

10) Novalis an August Wilhelm Schlegel in Jena. In: N. S. IV S. 237
11) Novalis an Friedrich Schlegel in Berlin. In: N. S. IV S. 236
12) Vgl. N. S. II S. 312
13) N. S. II S. 312ff.
14) Novalis an Friedrich Schlegel in Jena. In: N. S. IV S. 230
15) KI. IV S. 376
16) N. S. IV S. 29ff.
17) N. S. IV S. 29, u. s. w.
18) N. S. IV S. 31
19) N. S. IV S. 30
20) N. S. IV S. 34
21) N. S. IV S. 34
22) N. S. IV S. 35
23) N. S. IV S. 35f.
24) N. S. IV S. 36
25) N. S. IV S. 37
26) N. S. IV S. 39
27) N. S. IV S. 40
28) N. S. IV S. 41
29) N. S. IV S. 45
30) N. S. IV S. 48
31) N. S. IV S. 49
32) KI. IV S. 399
33) KI. IV S. 401
34) N. S. II S. 387
35) *Lettre sur la sculpture, Lettre sur les désirs, Lettre sur l'homme et ses rapports, Aristée ou de la Divinité, Alexis ou de l'âge d'or, Simon ou des facultés de l'âme, Lettre de Dioclès à Diotime, sur l'athéisme.*
36) N. S. II S. 318ff.
37) N. S. II S. 321f.
38) F. Hemsterhuis: *Alexis ou de l'âge d'or.* In: (Œuvres Philosophiques de M. F. Hemsterhuis. 2 Bde. Paris 1792 T. II p. 158
ちなみに Memnon 像は太陽の光を浴びると妙なる音を発すると言い伝えられている。メムノンはエチオピア王で，トロイ戦争の際，アキレスに殺された。
39) N. S. II S. 373

40) F. Hemsterhuis: a. a. O. T. II p.166
41) N. S. II S. 412
42) F. Hemsterhuis: a. a. O. T. II p. 100
43) N. S. II S. 562
44) F. Hemsterhuis: a. a. O. T. I p. 241
45) F. Hemsterhuis: a. a. O. T. II p. 247
46) N. S. II S. 313
47) N. S. IV S. 230
48) F. Hemsterhuis: Alexis In: a. a. O. T. II p. 168
49) N. S. II S. 373f.
50) F. Hemsterhuis: Alexis In: a. a. O. T. II p. 164/65
51) N. S. II S. 373
52) N. S. II S. 374
53) Vgl. N. S. II S. 328
54) F. Hemsterhuis: Aristée In: a. a. O. T. II p. 58
55) N. S. II S. 369
56) N. S. II S. 369
57) N. S. II S. 369
58) F. Hemsterhuis: Alexis In: a. a. O. T. II p. 161/62
59) N. S. II S. 372f.
60) N. S. II S. 373
61) Novalis an A. W. Schlegel in Jena. In: N. S. IV S. 252
62) F. Hemsterhuis: Aristée In: a. a. O. T. II p. 98
63) F. Hemsterhuis: a. a. O. T. I p. 232
64) Vgl. Morris Klein: Mathematics in Western Culture. Oxford University Press 1953
65) N. S. II S. 371
66) Vgl. Novalis an F. Schlegel in Dresden. In: N. S. IV S. 255 „die Idee einer *moralischen/im Hemsterhuisischen Sinn/Astronomie*" *u. s. w.*
67) N. S. II S. 419
68) N. S. II S. 419
69) N. S. II S. 421
70) N. S. II S. 462